KAWA TO HITO Magazine Vol.48

川と人

Vol.48

川と人 Vol.48

CONTENTS

○ご挨拶 …… 02
一般財団法人　石狩川振興財団　理事長
髙橋　季承

○特　集
・第９期北海道総合開発計画
共に北海道の未来を創る……03
・特定都市河川（千歳川流域）の
取組（流域水害対策計画）… 06
・新桂沢ダム竣工 …… 08
・厚真川水系
直轄特定緊急砂防事業完了…10
・インフラツーリズムで地域共創
……12

○9th GEWEX-OSC……15

○石狩川の歴史
・夕張シューパロダム
竣工から 10 年 …… 18
・平成26年９月11日の低気圧に
伴う豪雨災害から 10 年 ……19

○流域の現在
・東神楽町 / 花の環と人の環で
育み広げる …… 20
・南富良野町 / 世界へ発信、
道の駅を核とした成長戦略…21
・芦別市 / 星に合宿、そして、
山田錦の里へ …… 22

○世界川紀行……23
海外勤務の振り返り
スリランカでの３年間

○河川事業の紹介
・北海道初、MIZBE ステーション
整備について …… 27
・水辺を楽しみ･体験する旭川　28
・「恵庭かわまちづくり」の取り
組みが「全建賞」を受賞……30

○令和５年度河川・海岸協
力団体の取り組み……31

○石狩川振興財団の
活動報告
・流域環境保全活動 ……34
・河川教育活動 …… 35
・NPO・市民団体等への
支援・助成 ……36
・市町村河川情報委員
情報交換会議 ……37
・石狩川流域圏会議 ……38
・かわたびほっかいどう大賞
…… 39

ご 挨 拶

一般財団法人 石狩川振興財団 理事長
髙橋 季承

当財団は、北海道の河川とその周辺地域との結び付きを深め、河川流域の発展に寄与することを目的として平成４年に設立され、令和4年に設立30周年を迎えました。この目的を達成するため、設立以来、川と地域に関する情報の整備・提供、河川の関連事業の支援、川を生かした地域振興計画の立案、流域市町村や NPO 等と連携した流域環境保全活動や河川教育活動などに取り組んでいます。平成 23 年度からは、石狩川流域の全 46 市町村長で構成される「石狩川流域圏会議」と連携して、地域防災力の向上や流域圏全体の地域の活性化を目指した取り組みを進めています。

近年、全国各地で大雨災害が激甚化、頻発化しており、今後、気候変動の影響により、降水量の増加や水災害の頻発化が予測されています。このため、流域のあらゆる関係者が協働して流域全体で治水対策に取り組む「流域治水」が推進されています。当財団は、昨年度に引き続き、本年度においても国土交通省より「流域治水オフィシャルサポーター」として認定されたところであり、防災対策に関わる情報の発信や石狩川流域圏会議と連携した流域自治体の地域防災力向上のための支援など、「流域治水」に資する取り組みをより一層推進してまいりたいと思います。

一方、本年３月には新たな「第９期北海道総合開発計画」が閣議決定されたところですが、主要テーマの一つである「観光」の振興を図る観点から、北海道開発局が中心となって、川を通じた地域活性化の取り組みとして前計画策定後から進められてきた「かわたびほっかいどう」プロジェクトが、引き続き重点的に取り組む施策の一つとして位置づけられたところです。

当財団は、このような状況にも鑑み、川を活かした地域振興の観点から､関係の機関と連携しながら「かわたびほっかいどう」やサイクルツーリズム等の推進に取り組み、より一層地域の振興に寄与してまいりたいと思います。

加速化する人口減少や少子高齢化の状況の下、今後の北海道の地域の発展のためには、気候変動の影響により予測される水災害の激甚化・頻発化、観光や食を担う生産空間の維持・発展、カーボンニュートラルの実現などへの対応とそれに向けた DX、GX の取り組みの推進など、様々な課題に積極的に対応していく必要があります。

このため、石狩川振興財団が築いてきた地域や河川管理者等とのコミュニケーションネットワークを活かし、河川流域を取り巻く諸課題に取り組み、地域の発展に貢献してまいりたいと思っておりますので、引き続きのご指導、ご支援をお願い申し上げます。

令和６年８月

第９期北海道総合開発計画 ～共に北海道の未来を創る～

北海道開発局建設部河川計画課長　空閑　健
（前北海道開発局開発監理部開発調整課長）

北海道総合開発計画は、北海道開発法に基づき、
昭和 26 年の第 1 期計画以降、現在に至るまで、北海道の資源や特性を活かして、
その時々の我が国の課題の解決に貢献することを目的として策定されてきました。
ここでは、今年 3 月に閣議決定された第 9 期計画について紹介します。

直前の第 8 期計画は 2016 年に策定されましたが、その計画期間の途中、2020 年から 3 年の間に、3 つの大きな事象が発生しました。1 つめは、2022 年に始まったロシアによるウクライナ侵攻です。食料の不足や価格高騰という深刻な影響により、食料安全保障という問題が浮き彫りになりました。2 つめは、2020 年から世界に拡がった新型コロナウイルス感染症です。世界中の人の動きと経済活動が止まり、観光をけん引してきたインバウンド需要が消失するなどの甚大な影響を受けました。3 つめは、世界が一斉に再生可能エネルギーにシフトしている中、日本でも 2020 年に当時の菅総理が「2050 年カーボンニュートラル宣言」を行いました。再生可能エネルギーの発掘とそこへのシフトは喫緊の課題です。

我が国のこれらの危機や変化に対しては、高い食料供給力、魅力的な観光資源、豊富な再生可能エネルギーといった、北海道のポテンシャルを活かさずしてこれを乗り越えられないことから、北海道開発の必要性が改めて認識されることとなりました。こうした背景により、第 8 期計画の計画終了期間（10 年間）を待たずに新たな計画を策定する必要性が高まり、国土審議会での議論を経て、今年 3 月に第 9 期計画が閣議決定されました。

第 9 期計画では、大きく 2 つの目標を掲げています。これまでの北海道の強みや価値である「食」と「観光」に加えて、全国でも群を抜いて豊富に存在する再生可能エネルギーのポテンシャルなど、「他で代替できない北海道の価値」を最大化することを 1 つめの目標としています。他で代替えできない価値として、アイヌ文化の振興、北方領土隣接地域振興、自然共生社会の形成、さらには、ラピダスに代表される半導体関連産業の進出などの地域の強みを活かした成長産業も施策として加えています。

図１に示すように、食・観光・再エネなどの北海道の価値を生み出すのは、地方部のいわゆる「生産空間」であり、実際にそこに人が住んで、なりわいを営むことで生まれます。人口減少・少子高齢化等の厳しい状況の中、生産空間に住み続けられる環境を作ることが、北海道が価値を生み出すための重要な基盤であり、これを２つめの目標としています。

図１：北海道の価値を生み出す「生産空間」の分布

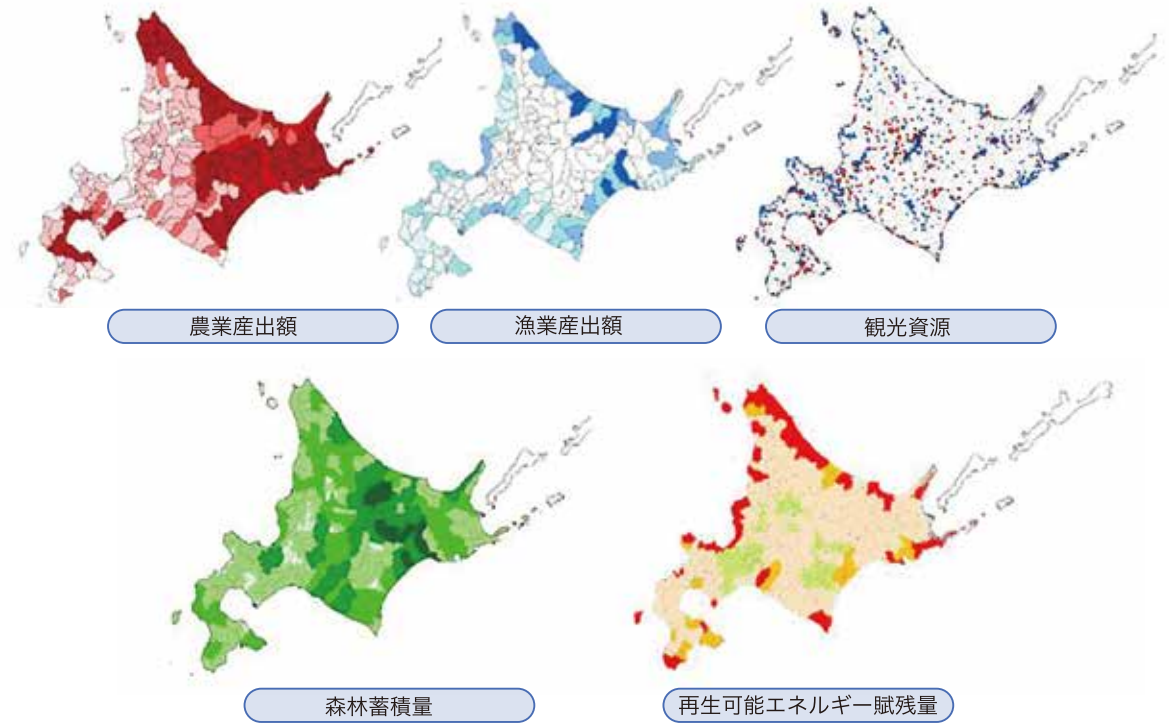


図２：北海道の特性

図２に示すように、北海道は、マクロ的（都市間距離）には広域分散、ミクロ的（集落形態）には散居型であり、いわば「二重の疎」の状況です。人が実際に生産空間に住み、実際に生産空間に行くことにより北海道の価値が生まれます。物理的な距離を超越させるデジタル技術の活用とともに、時間的距離を短縮させる交通ネットワーク等のインフラ整備が欠かせません。

また、北海道は、気候変動の影響により降雨量の増大が全国で最も大きいと予測されているうえ、日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震等の大規模自然災害が切迫しています。2016 年の北海道豪雨では、農地や物流網が壊滅的な被害を受けた結果、農作物の著しい品薄や価格高騰など、全国に大きな影響を及ぼしました。災害から生産空間を守り、地域を守ることは、そこに安全・安心に住み続け、なりわいを営み続けられる最も重要な要素であり、しっかりと国土強靱化を進めていく必要があります。

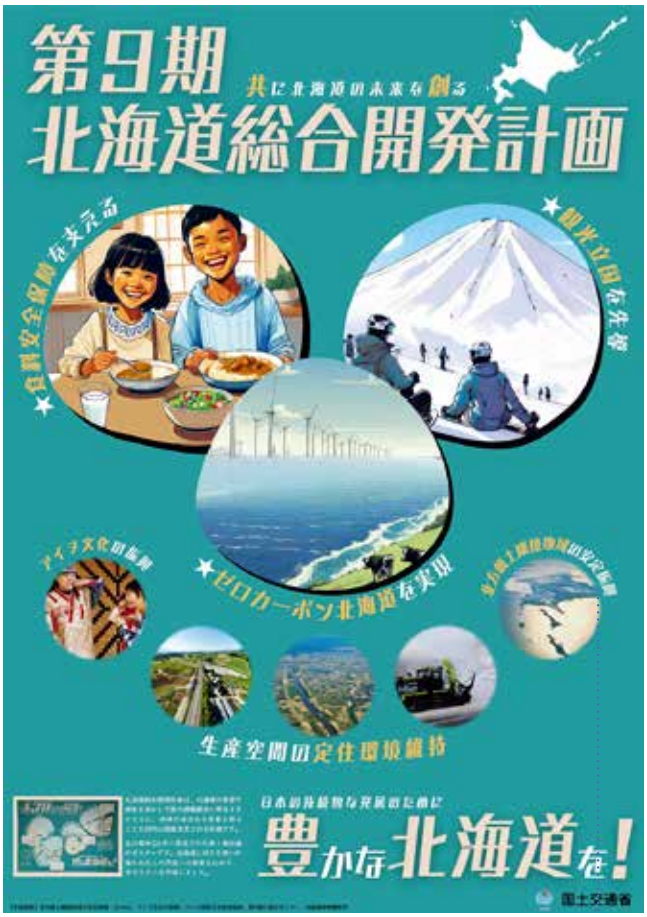
以上のように、北海道の果たす役割がこれまでにないほど期待されているなか、他で代替できない北海道の価値を最大化していくこと、それを生み出す基盤となる生産空間を守っていくこと、この２つが、第９期計画の柱となる目標です。しかし、北海道の価値は未だ潜在的なものも多く、これを顕在化させること、また、生産空間に住み続けられる環境を維持していくこと、これらは決して簡単ではありません。地域の課題を解決し、価値を向上させるには、国、北海道庁、市町村、NPO、民間事業者、教育機関、報道機関等が連携･協働していくことが必要であり、計画を進めるにあたっては、「共に北海道の未来を創る～共創～」をスローガンとして掲げています。

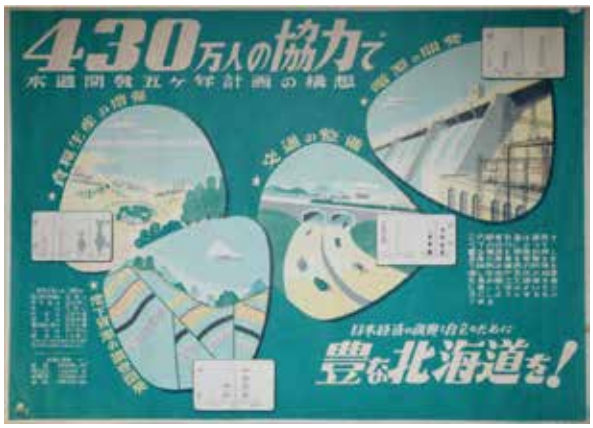
例えば河川関係でいえば、流域のあらゆる関係者が協働して治水対策を行う「流域治水」はまさに「共創」の最たる取組であり、更なる加速化・深化が求められています。また、河川管理者、地域、民間事業者等が連携して北海道の河川の魅力を引き出す「かわたびほっかいどう」、さらには、千歳川の舞鶴遊水地に５年連続で今年もタンチョウのヒナが誕生しましたが、こういった地域等の関係者が参画する「グリーンインフラ」の取組も、「共創」の代表的事例です。

北海道総合開発計画は、国土交通省の施策のみならず、他省庁関係の施策も含む、総合的な計画となっています。国土交通省北海道局の総合調整のもとに開発局が施策を実行するなど、北海道開発体制により総合的に取組を進めます。北海道開発局は、他の地方整備局の機能に加え、農業基盤整備を所掌しています。開発局には本年４月より、北海道総合開発計画の推進を目的とした組織として、各開発建設部に「地域連携課」を新設し、地域との連携強化を図るとともに、地域との共創、官民共創を実践する体制をつくっています。

図３は、第９期計画のポスターです。今後、第９期計画が、豊かな北海道と日本を創っていくよう、皆で「共創」の取組を進めていきたいと考えています。

図３：第９期北海道総合開発計画のポスター





↑昭和26年に策定された「第１期北海道総合開発計画」のポスターです。北海道に対する思いが描かれたこの作品への敬愛を込めて、本ポスターが作成されています。

北海道総合開発計画
第９期北海道総合開発計画について

流域治水 特定都市河川(千歳川流域)の取組(流域水害対策計画)

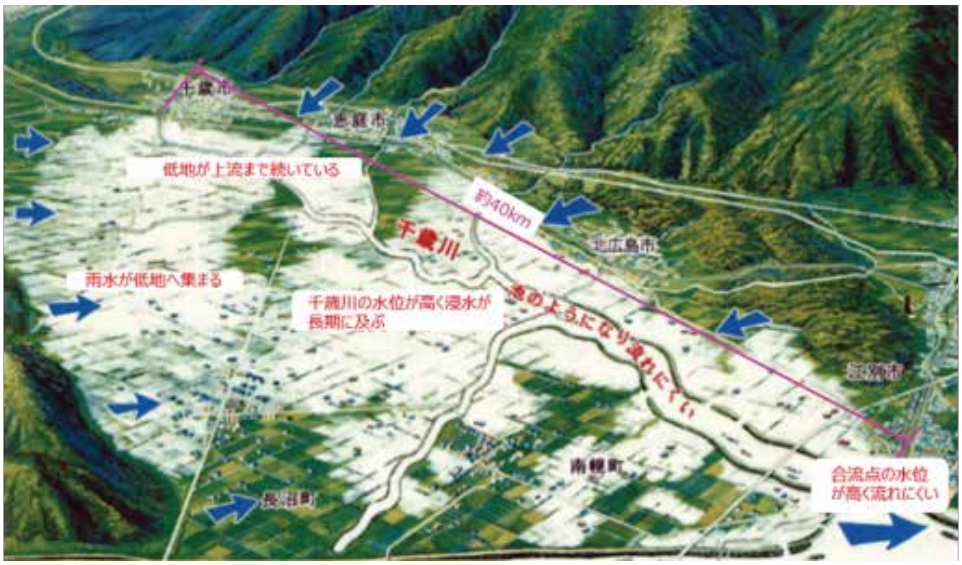
北海道開発局　建設部　河川計画課

◉「特定都市河川」の指定について

「特定都市河川」とは、気候変動の影響による水災害の激甚化・頻発化等を踏まえ、集水域（雨水が河川に流入する地域）から氾濫域（河川等の氾濫により浸水が想定される地域）にわたる流域に関わるあらゆる関係者が協働して水災害対策を行う**「流域治水」の実効性を高め、強力に推進**するため、河川、流域を指定し、**流域治水の施策・制度の活用**により河川整備の加速化に加え、流域における雨水流出抑制対策等を法的枠組みのもとに推進し、**流域における水害への安全性向上の加速化を図る**ものです。**特定都市河川の指定を踏まえ、浸水被害対策の総合的な推進のための流域水害対策計画（河川管理者、下水道管理者、都道府県知事、市町村長が共同）を策定**し、河川管理者等による施設整備の加速化、地方公共団体や民間事業者等による雨水貯留浸透施設の整備、雨水の流出を抑制するための規制、水害リスクを踏まえたまちづくり・住まいづくり等、流域一帯となった浸水被害の防止のための対策を推進します。

◉千歳川等の特定都市河川への指定

千歳川流域は、広大な低平地が広がっているため、洪水時に石狩川の高い水位の影響を約 40km にわたり長時間受けるという治水上の課題を有しています。現在、河川管理者により、遊水地や河川整備等により洪水を計画高水位以下で流す対策を推進しておりますが、低平地を貫流する地形的特性のため、宅地や農地等に降った雨水は河川に流れ込むことができないといった内水による浸水被害の防止が困難な流域です。これらを踏まえ、改正特定都市河川浸水被害対策法（令和 3 年 11 月全面施行）により指定要件が拡大された特定都市河川制度により、流域治水の推進を図るものです。



流域治水

令和５年８月に千歳川及びその流域を特定都市河川に指定し、国、北海道、関係市町で構成する千歳川流域水害対策協議会において、千歳川流域水害対策計画を策定しました。

◉千歳川流域水害対策計画における主な施策

堤防整備

排水機場の排水規制緩和

【平常時】

【洪水時】

○河川整備の加速化（主体：北海道開発局・北海道）

・河川整備にあたっては、流域治水整備事業（国直轄事業）や特定都市河川浸水被害対策推進事業（個別補助事業）を活用して事業の加速化による堤防決壊等の壊滅的な被害の軽減を図ります。

・河川整備の進捗に応じた排水機場の排水規制の緩和・機能増強等により内水被害軽減を図ります。

・流域各地で頻発する内水氾濫に対して、排水ポンプ車等により円滑かつ迅速に内水排除を行うため、必要な進入路、作業ヤードを確保するとともに釜場を整備します。

○流域における雨水流出抑制対策（主体：北海道・市町）

・流域における浸水の拡大を抑制する観点から、洪水や雨水を一時的に貯留する機能を有する土地について、「貯留機能保全区域」の指定に向けた検討を行うことや、流域内の雨水が河川へ急激に流入することを抑制するため、公共施設（学校・公園等）用地等への雨水貯留浸透施設の整備を検討します。

・地方公共団体や民間事業者等による雨水貯留浸透施設の整備及び水田の活用（「田んぼダム」）やため池の治水利用等を推進します。

○流域全体でのソフト対策（主体：全関係機関）

・洪水ハザードマップ等の適切な防災情報の提供を図るとともに、水防訓練等の公開や防災学校での体験授業や高校での総合学習時間等を活用した、防災教育の機会創出等を行い、流域住民の水防意識の高揚に努めます。

新桂沢ダム竣工

北海道開発局　札幌開発建設部　幾春別川ダム建設事業所

桂沢ダム（以下、既設ダムとする）は、石狩川水系幾春別川上流に位置する北海道初の直轄多目的ダムであり、洪水調節・かんがい・水道用水・発電を目的として昭和32年度に完成しました。しかし、石狩川水系で甚大な被害があった昭和50年、昭和56年洪水等を踏まえ、洪水から貴重な生命・財産を守り、地域住民が安心して暮らせる社会基盤の整備を図ることや、時代の変化とともに流水の正常な機能の維持や工業用水等の新たな水源確保の必要性が生じました。このため、既設ダムを嵩上げする新桂沢ダムとともに、幾春別川支流である奔別川に三笠ぽんべつダムを新たに建設する幾春別川総合開発事業が昭和60年度に計画され、平成2年度に建設事業に着手しました。

↑試験湛水

今回は、令和元年7月にコンクリート打設を完了し、令和6年3月に試験湛水が完了、4月より供用を開始した新桂沢ダムについて紹介します。

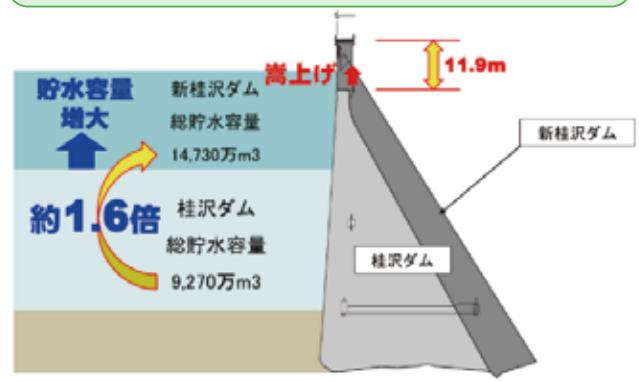
◉新桂沢ダムの概要

新桂沢ダムは、我が国の直轄ダムとしては初めて、同軸で11.9m嵩上げを実施するダムであり、洪水調節・流水の正常な機能の維持・工業用水・水道用水・発電を目的としています。堤高を約1.2倍嵩上げすることで総貯水容量が約1.6倍となり、効率的に治水・利水機能を増大させるもので、既設ダムの有効利用により環境への負荷も抑えることができます。また、①堤体の安定性に直接影響する規模の断層破砕帯・劣化帯が、新設及び既設ダム堤体敷に分布せず、座取り選定上の問題がなかったこと、②新桂沢ダムの取水放流設備を先行して施工することで、工事中であっても既設ダムの洪水調節機能や利水補給を確保できること、③複数案との経済比較を行い、最も経済的だったこと等から、新桂沢ダム建設の最大の特徴である「同軸嵩上げ」方式を採用しています。

新桂沢ダムおよび桂沢ダムの諸元

項目		桂沢ダム（既設）	新桂沢ダム
堤体	位置	北海道三笠市桂沢地先	
	型式	重力式コンクリートダム	
	堤高	63.6m	75.5m(+11.9m)
	堤頂長	334.25m	397.00m(+62.75)
	堤体積	350,000m³	594,800m³(+244.8千m³)
	非越流部標高	EL.188.60m	EL.199.90m
貯水池	集水面積	298.7km²(うち、間接流域147.5km²)	
	湛水面積	4.99km²	6.66km²(+1.67km²)
	総貯水容量	92,700千m³	147,300千m³ (+54,600千m³)
	有効貯水容量	81,800千m³	136,400千m³ (+54,600千m³)
	洪水貯留準備水位	EL.184.75m	EL.190.70m
	平常時最高水位	EL.187.00m	EL.193.10m
	洪水時最高水位	EL.187.00m	EL.196.80m
	設計洪水位	-	EL.198.90m
	最低水位	EL.158.00m	EL.158.00m
計画流量	計画高水流量	550m³/s	910m³/s
	ダム設計洪水流量	660m³/s	1,200m³/s

新桂沢ダム断面図



◉新桂沢ダムの技術的特徴

新桂沢ダムの建設にあたっては、施工期間中も既設ダムと同等の洪水調節機能や利水補給機能を確保する必要がありました。しかし、既設ダムの堤体下流面に腹付けコンクリートを打設しなければならず、既設ゲートから放流できない期間が生じるため、転流工として新桂沢ダム完成後の使用も見込んだ新取水塔を先行して施工し、既設ダムと同等の機能を確保しました。また、コンクリートの水和熱と、コンクリート表面が越冬時に急激に冷やされることで発生する温度応力により、堤体表面にひび割れが発生しやすくなるとともに、新桂沢ダムと既設ダムの接合部の一体化という同軸嵩上げダム特有の技術的課題があります。そこで、既設ダムコンクリートへの給熱や、耐凍害性を確保したコンクリート配合、既設ダム堤体表面を粗面とすることによる新旧コンクリートの密着性を高める取り組み等を行っています。 このような取組を実施し、安全に施工完了したことが評価され、令和５年度土木学会賞（技術賞）を受賞することができました。

◉新桂沢ダムの試験湛水

新桂沢ダムの試験湛水は、再開発ダムであることから、既設ダムの経験水位を超える既設ダム常時満水位（EL187.0m）からサーチャージ水位（EL196.8m）までの貯水位区間を試験湛水の対象としています。

令和５年 11 月に試験湛水を開始し、11、12 月は流況が良く、計画年より 60 日早い令和５年 12 月 15 日にサーチャージ水位に到達し、令和６年３月８日に試験湛水が終了しました。

新桂沢ダムの試験湛水では、貯水位上昇時、下降時においても、ダム堤体の安全性を評価する漏水量、揚圧力、堤体変位や貯水池周辺の地すべり、管理設備に異常は見られず、ダム施設の安全性を確認することができました。

↑サーチャージ水位到達時の状況

◉おわりに

新桂沢ダムは、平成２年度の建設事業着手から 34 年の期間を経て、令和６年６月９日に竣工式を迎えました。この間、事業の実施にあたり、地権者の皆様をはじめ、ご協力頂いた多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

現在、当事業では、三笠ぽんべつダムの工事を鋭意進めています。今後、三笠ぽんべつダムとともに、新桂沢ダムが地域の安全安心と発展に寄与し、末永く地元の方々に親しまれるよう努めて参ります。

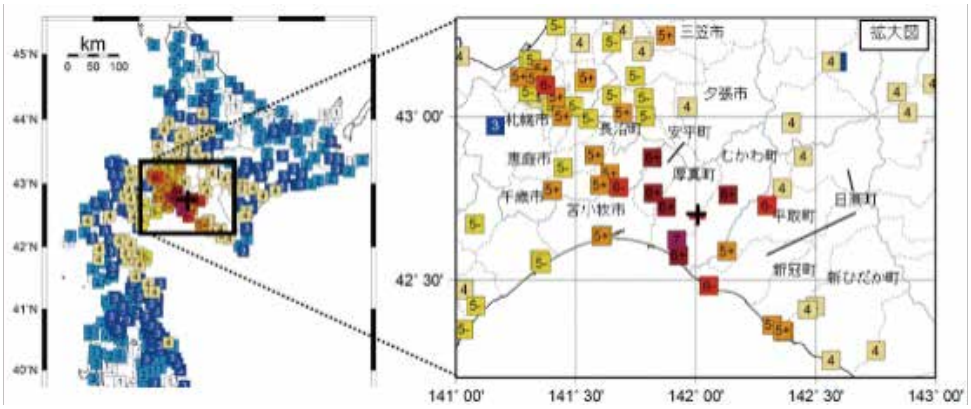
↑新桂沢ダム竣工式

厚真川水系直轄特定緊急砂防事業完了

北海道開発局 室蘭開発建設部　苫小牧砂防海岸事務所

◉平成 30 年北海道胆振（いぶり）東部地震の概要

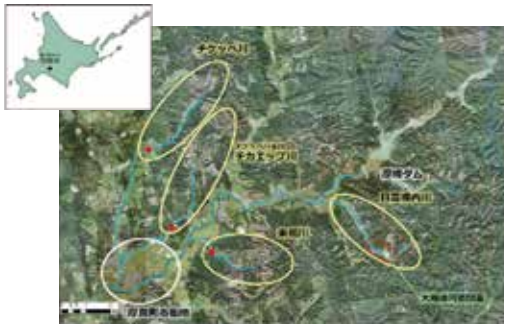
平成 30 年 (2018 年) 9 月 6 日午前 3 時 7 分に北海道胆振地方中東部を震源として、マグニチュード 6.7、最大震度 7 を記録する「平成 30 年北海道胆振東部地震」が発生しました。この地震による大規模な土砂災害等により、44 名の尊い命が失われるなど甚大な被害をもたらしました。



↑平成 30 年北海道胆振東部地震の震源地周辺における震度分布

◉厚真川流域における土砂災害状況

平成 30 年北海道胆振東部地震により 227 件の土砂災害が発生し、厚真川水系日高幌内川では山腹崩壊による大規模な河道閉塞が確認されました。調査の結果、日高幌内川の右岸斜面が幅約 400m、長さ 800mに渡って崩壊し、崩壊の移動長が約 350m、約 1.1ｋｍに渡る大規模な河道閉塞が確認されました。また、日高幌内川以外の支川においても、数多くの土砂災害が発生し、チケッペ川、チケッペ川支川チカエップ川、東和川などでは大規模な山腹崩壊の発生により、河道内には大量の不安定土砂の堆積が確認されました。



↑厚真川水系直轄砂防事業の実施箇所

↑日高幌内川における大規模河道閉塞

◉厚真川水系における土砂災害対策の概要

1. 緊急的な監視体制の構築及び緊急対策工の概要

日高幌内川においては、河道閉塞部及び湛水池の上下流部に緊急的に監視カメラや水位計を設置し、迅速に監視観測体制を構築しました。また 9 月 25 日の北海道知事から国土交通大臣に対する要請を受け、日高幌内川のほか、厚真町市街地に近いチケッペ川、チカエップ川、東和川において、国直轄による緊急的な砂防事業として直轄砂防災害関連緊急事業に着手しました。日高幌内川では、水路工、基幹砂防堰堤、下流砂防堰堤を融雪出水前の平成 31 年 3 月 26 日に概成し、チケッペ川、チカエップ川、東和川では本格的な台風シーズン前の令和元年 8 月上旬までに砂防堰堤各 1 基を概成しました。

↑日高幌内川緊急対策工

2. 恒久対策工の概要

平成 31 年度からは、緊急対策工に引続き、直轄特定緊急砂防事業として砂防設備の恒久対策に着手し、日高幌内川では河道閉塞部の安定化、土砂流を減勢し安全に流下させることを目的に、重力式コンクリート砂防堰堤 1 基（堤高 11.5 m、堤長 170m）、ブロック砂防堰堤 1 基（堤高 8.74m、堤長 146.3m）、渓流保全工 (延長 295.5m)、水路工（389.7m）、法面保護工の施工を実施しました。チケッペ川・チカエップ川･東和川では同様の目的で重力式コンクリート砂防堰堤をチケッペ川に 1 基（堤高 14.5m、堤長 226m）、チカエップ川に 1 基（堤高 10m、堤長 169m）、東和川に 1 基（堤高 9m、堤長 151m）の施工を実施しました。

↑日高幌内川基幹砂防堰堤（恒久対策）

◉砂防事業完成にあたり

1. 平成３０年北海道胆振東部地震による厚真川水系砂防事業完成式

厚真川水系砂防事業の完成を迎えたことから、令和 6 年 3 月 2 日に、国土交通省、北海道、厚真町で完成式を共同開催しました。完成式では北海道開発局及び北海道から工事経過の報告が行われ、柿崎北海道開発局長から鈴木北海道知事へ工事完成図書目録の引渡しを行いました。

2. 竣工記念碑除幕式

完成式終了後、竣工記念碑除幕式を行いました。

竣工記念碑は、直轄事業及び補助事業の砂防工事に従事した施工会社で構成された「厚真川水系砂防工事施工者連絡会」において製作されました。

↑平成 30 年北海道胆振東部地震による厚真川水系砂防事業完成式
（工事完成図書目録の引渡し）

↑竣工記念碑除幕式

◉おわりに

本災害によりお亡くなりになられた方々に、謹んでご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げます。調査・設計コンサルタント、工事施工会社には震災後の冬期を含む厳しい施工条件のなか、事業の推進にご協力いただき、様々な技術的課題を克服し円滑に事業を実施したことが評価され、令和５年度全建賞を受賞することができました。

また、緊急的な砂防事業の着手が決定してから、早急に住民説明会を開催する際には、地域の方への案内状の配布や会場確保など厚真町役場の町長をはじめとする職員の皆様に全面的にご尽力いただきました。本事業に関係された全ての皆様に厚くお礼申し上げます。

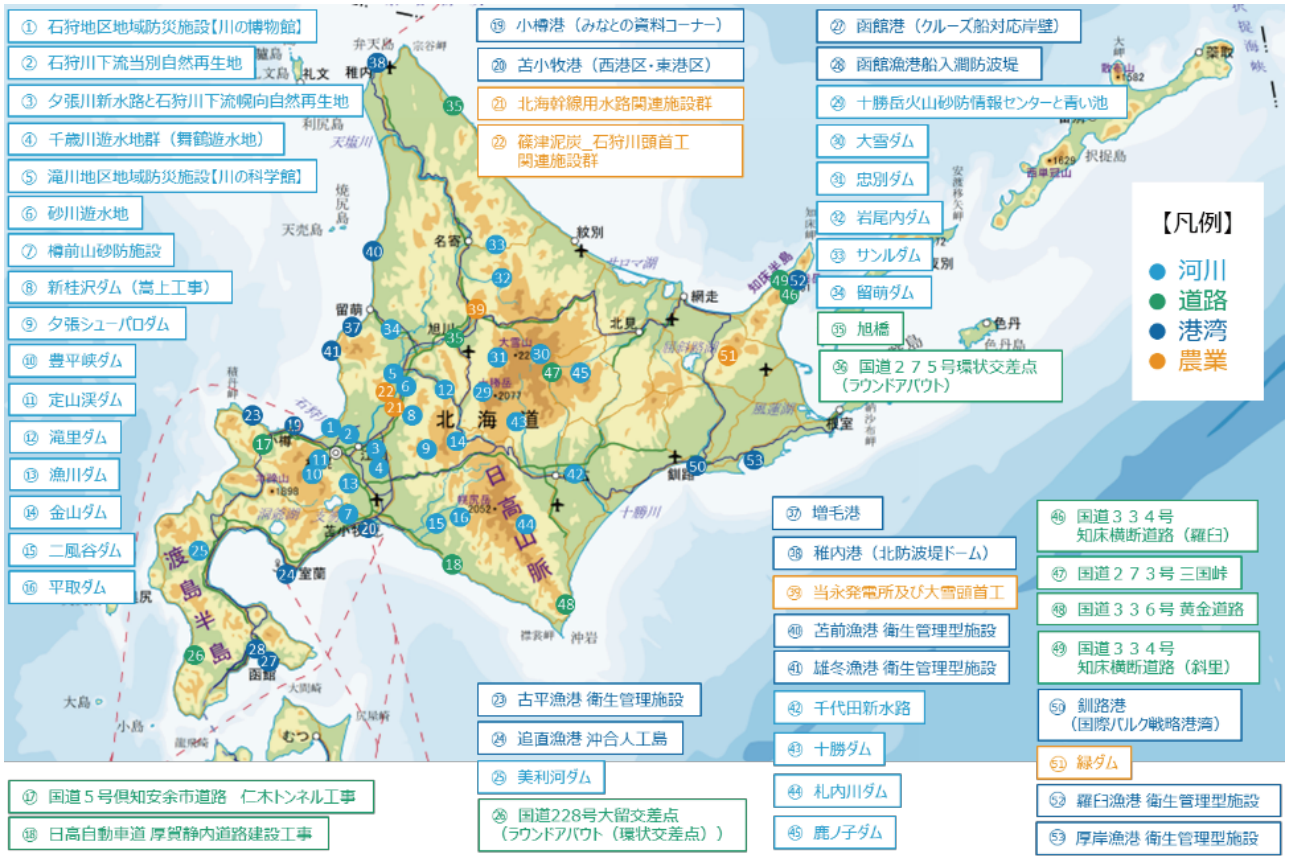
インフラツーリズムで地域共創

北海道開発局　開発監理部　開発連携推進課

北海道開発局では、整備・維持管理するインフラを観光資源として活用して頂く取り組みを進めています。平成 25 年に始まった取り組みで、専用のホームページを開設している旅行事業者様もあり、毎年ツアーの催行を行って頂いています。

○インフラ見学枠の公開

旅行業者の方がツアーの一部として旅行商品に組み込む見学枠を公募しています。管理ダムなどお馴染みの施設に加えて、近年では供用後は見学が難しい工事中の橋梁やトンネルなど特別感のある見学枠をご用意しています。



本年度もこれまでに、シービーツアーズ様による、“北海道開発局「インフラツーリズムほっかいどう」国道５号トンネル工事現場見学と木田金次郎美術館・海鮮丼”がツアーとして販売され催行されています。

↑北海道開発局「インフラツーリズムほっかいどう」国道５号トンネル工事現場見学と木田金次郎美術館・海鮮丼

○地域共創インフラツアー

地域の複数の関係施設を巡る一連のツアー形式で各開発建設部が企画したものを公募する『インフラわくわくツアー』に取り組んできました。この度、第９期北海道総合開発計画を推進する官民の垣根を越えた『協創』に取り組むため『インフラわくわくツアー』を『地域共創インフラツアー』としてリニューアルしました。

旅行業者や地域の関係者の方々のノウハウを取り入れやすいよう、公募にあたってツアーの内容の条件を極力少なく出来るようにしています。このことによって、地域の関係者や旅行業者の方々との対話を通じて訪問先などを柔軟に組み合わせてツアーを共創していく取り組みとしています。

公募を行い、応募のあったツアーについて、催行に向け各開発建設部の地域連携課が中心となって催行して頂く旅行業者や地域の関係者の方々との調整が進められています。

（催行準備中）ツアーテーマ	
函館編	～過去から現代までの歴史を巡る～時代と共に発展してきた「みなみ北海道の交通」を見てみよう！
砂川編	日本３大河川石狩川の治水の歴史と砂川遊水地
帯広編	国立公園に指定される日高山脈の自然を眺めて十勝の川と農業を見学！体験！食べる！～インフラ施設と農業を知って食に興味を持とう～
網走編	「開拓の鍬（くわ）」から最先端技術まで～道路建設の過去・現在・未来～
（6/21 ～募集中）ツアーテーマ	
小樽編	日本一の清流「尻別川」が育む豊かな食を知って味わう旅
室蘭編	平取町でアイヌ文化と沙流川の役割を学び、体感するツアー
稚内編	稚内発展の歴史
豊富幌延編	地域の恵みを知ろう！～インフラ整備から牛乳製造まで～
（6/26 ～募集中）ツアーテーマ	
釧路編	釧路川と釧路発展の基盤となった産業の歴史
根釧編	日本の酪農を支える根釧地域を学ぶ

↑令和６年度に公募を行っている地域共創インフラツアー（6 月末現在）

◉インフラツーリズム魅力倍増プロジェクト

【白鳥大橋】

国土交通省（総合政策局）では、インフラツーリズムの拡大に向け、モデル地区を設定しています。北海道では『白鳥大橋』が指定され、室蘭市、室蘭観光協会など地域の関係機関と開発建設部が連携し、安全対策やガイドの育成などの検討・実践が行われてきました。

その結果、現在では民間企業により、白鳥大橋の主塔に登頂するツアーが催行されています。令和５年には 300 人を超える観光客の皆様に室蘭港を一望する 360°の大パノラマを体験して頂きました。

【青い池（美瑛川ブロック堰堤）と十勝岳火山砂防情報センター】

昨年、『青い池（美瑛川ブロック堰堤）と十勝岳火山砂防情報センター』が同プロジェクトに選定されたところです。

美瑛町と上富良野町にまたがる地域では、十勝岳ジオパーク(令和４年認定)を形成しています。十勝岳ジオパーク推進協議会の事務局や協議会を構成する両町、各観光協会と連携して取り組んでいます。

↑24 時間体制の観測施設。シアタールームなど火山防災を学べる施設を併設

○日本初『インフラ・ジオツアー』の提案

十勝岳の自然の営みにより創り出された波状丘陵に明治以降の開拓を通じて形成された農地の景観は多くの旅行者を魅了しています。また、十勝岳の噴火への対応のための緊急対策が生み出した青い池は世界的に有名な観光地となりました。

これら、十勝岳と地域の自然と人間の営みが織りなす物語を新たな地域の魅力として伝える、日本初の『インフラ・ジオツーリズム』を提案しています。

↑昭和 63 年の噴火への対応として北海道開発局が緊急的に設置した堰堤

○『インフラ・ジオツアー』による地域の課題への貢献

通過型観光を滞在型へ変容させ、観光による経済効果の向上を図ることが地域の観光についての大きな課題です。青い池や丘の景色を見るだけで通過していく観光では、十分な経済的恩恵が得られません。特別感があり、満足度の高いガイド付のツアーやツアーの物語に組み込まれた地域の食を体験して頂ける一連の観光を提供することで、滞在時間が延び、それが宿泊にもつながります。

そういった長期滞在につながる要素を備えた観光として、『インフラ・ジオツアー』を造成・提供することを目指しています。地域の方々との共創により、地域の観光に関する課題解決に繋げていきます。只今“地域と共創中”の日本初の『インフラ・ジオツアー』が販売されましたら、ぜひともご参画ください！

↑青い池

↑十勝岳連邦と美瑛川

第９回
全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議（9th GEWEX-OSC）が開催されました。

↑第９回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議開会式

GEWEX　Water ● Climate | 水 ● 気候

2024 年 7 月 8 日（月）から 12 日（金）まで、京王プラザホテル札幌において、第 9 回全球エネルギー水循環プロジェクト国際会議（9th GEWEX-OSC）が開催されました。今回の会議は日本では初の開催であり、会議全体のテーマは Water ● Climate、水 ● 気候でした。コロナ禍明けでは初めての開催でもあった今回、45 の国と地域から参加登録約 900 人、関係者を含めて約 1300 人が参加し、過去最高の参加人数だった 2014 年の第 7 回オランダ（ハーグ）の 560 人を超え、史上最大規模の GEWEX-OSC となりました。石狩川振興財団も協賛企業として名を連ねたことから、本会議について概要を報告します。

↑Peter van Oevelen 国際 GEWEX 事務局長

開会式では、Peter van Oevelen 国際 GEWEX 事務局長、山田朋人国際会議組織委員長に続き、岸田文雄総理大臣からの参加者に対する歓迎と会議の成功を祈念するメッセージが披露されました。続いて、日比谷潤子日本学術会議副会長、寳金清博北海道大学総長、秋元克広札幌市長、Detlef Stammer 世界気候研究計画合同科学委員会委員長が登壇しました。

開会式に引き続くプレナリーセッションにおいて、こやり隆史国土交通大臣政務官が講演しました。

国土交通省の取組みとして、気候変動の将来予測データを活用した治水対策と気象予測データを活用したハイブリッドダムの取組について紹介しました。気候変動に伴い深刻化する洪水や渇水、水循環の維持・回復などの課題に対して、国際協力の重要性を強調しました。

官学連携の研究や社会実装が進展し、「WATER BY ALL」の考え方が共有されることへの期待が表明されました。

↑こやり国土交通政務官

GEWEX とは

全球エネルギー水循環プロジェクト（GEWEX）とは、国際学術会議（ISC）、世界気象機関（WMO）、ユネスコ政府間海洋学委員会（IOC-UNESCO）が共同出資する世界気候研究計画（WCRP）が進めるコアプロジェクトのひとつです。地球の地表、地下、大気における水とエネルギーの循環過程の理解促進を目的に、この分野の研究推進のプラットフォームを提供しています。

◎過去の GEWEX-OSC 開催状況

年	国	都市	人数	国・地域
1994	英国	ロンドン	300	20
1996	米国	ワシントン	300	20
1999	中国	北京	280	24
2001	フランス	パリ	250	20
2006	米国	コスタ・メサ	300	23
2009	オーストラリア	メルボルン	400	32
2014	オランダ	ハーグ	560	45
2018	カナダ	キャンモア	380	40
2024	日本	札幌	1,300	45

全球のエネルギー水循環に関する最先端研究の英知が集い、活発な議論とその成果の社会への還元が期待されます。Open Science Conference (OSC) は GEWEX で最大の国際会議となっています。

学術セッション

学術セッションは以下の 3 つのテーマを基に 30 のセッションに細分され、口頭発表とポスター発表が実施されました。

1. 水、気候、人新世
2. 極端事象とリスク
3. 水、エネルギー、炭素プロセス

↑学術セッションの様子

↑ポスターセッション会場

今回日本で開催されたこともあり、日本国内に加えアジア諸国からの参加も多く、アジアで特徴的な課題である洪水研究、予測、影響評価、緩和戦略に関する発表が多く見られました。

ステークホルダーセッション

日本では学術的な知見に基づいた気候変動適応策等の社会実装が進んでいるという実態に鑑み、学術側だけではなく社会実装する政策側からの視点でステークホルダーセッションを開催しました。日本における水災害リスク評価、流域治水、気候変動適応策、途上国での施策と連動した取組等を、各国から集う研究者等に向けて発信し、海外の最先端の技術者たちと議論、意見交換を行ないました。

セッション主催者

・セッション大
　国土交通省、農林水産省、環境省、
　科学技術振興機構、国際協力機構
・セッション小
　行政機関、大学、研究所、各種団体等

↑ステークホルダーセッション

レセプション／バンケット／企業展示

会議初日の７月８日（月）にはウェルカムレセプション、３日目の７月 10 日（水）にはバンケットが開催され、会議以外でも情報交換と懇親を深める場となりました。また、会議期間中を通じて各企業がブース展示を行ないました。

↑ウェルカムレセプション

↑企業展示

閉会式

７月 12 日（金）の閉会式では、会議の総括、主な成果の報告が行なわれました。若手会合の成果報告、若手優秀ポスター表彰が行われ、今回の特徴であったステークホルダーセッションへの言及や、すべての関係者への謝辞と今後の北海道や日本への期待などがコメントされました。

↑閉会式の様子

※写真は一部、札幌実行委員会提供

夕張シューパロダム竣工から10年

石狩川の歴史 壱

夕張シューパロダムは、平成27年度から運用を開始して以来、本年令和6年に10年目を迎えた。夕張シューパロダムは、全国でも数少ない農水省の直轄管理施設であった大夕張ダムを再開発し、洪水調節機能を持たせたダムであり、全国唯一農水省との共同事業として実施したものである。

昭和56年8月に台風12号が北海道を襲い、石狩川流域は戦後最大の洪水に見舞われた。これを受け、北海道開発局は「石狩川水系工事実施基本計画」を改定し、夕張川に治水ダムを建設する計画を立案し、平成3年度に実施計画調査に着手、平成7年に建設し、平成26年度に完成した。

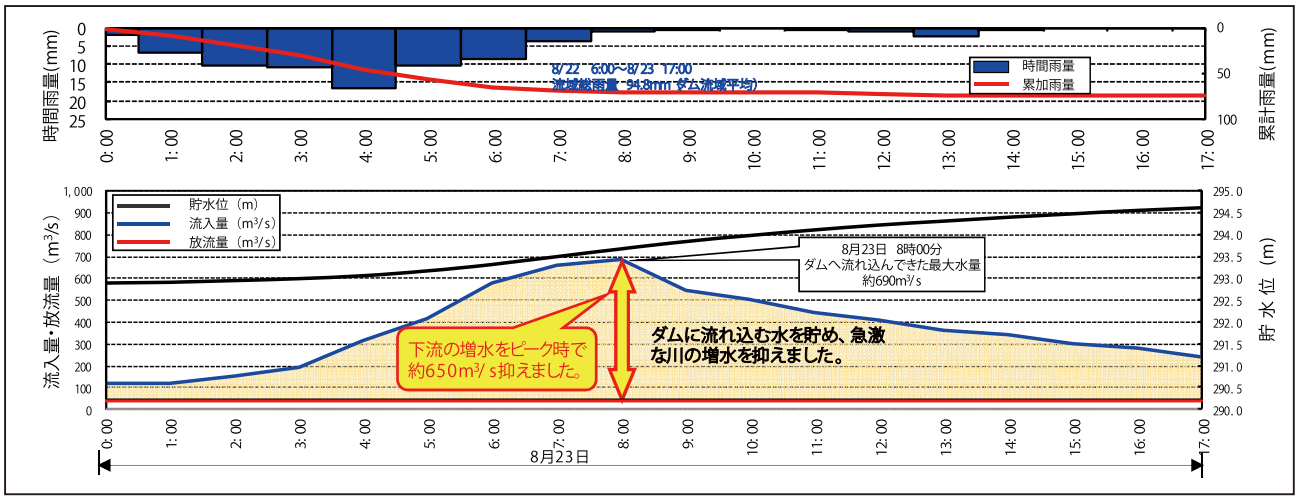
夕張シューパロダムは、夕張川及び本川下流部の洪水被害軽減のみならず、千歳川・夕張川の両流域に広がる道央地区の灌漑用水等の確保のため建設された。

その貯水容量は、直轄ダムとしては国内最大で、発電専用ダムを含めて全国第4位である。また、その貯水池の湛水面積は、国内最大の朱鞠内湖に次いで全国第2位の規模を誇る。

平成28年8月に北海道を襲った連続した台風による豪雨の際には、夕張川下流域において大きな水位低減効果を発揮し、洪水被害の軽減に貢献した。

↑夕張シューパロダム

↑試験湛水前の夕張シューパロダムと大夕張ダム・三弦橋　（画像：北海道開発局）



↑平成28年8月降雨の夕張シューパロダムの防災操作（札幌開発建設部資料より）

「平成26年9月11日の低気圧に伴う豪雨災害」から10年
～道内で初めての大雨特別警報の発令～

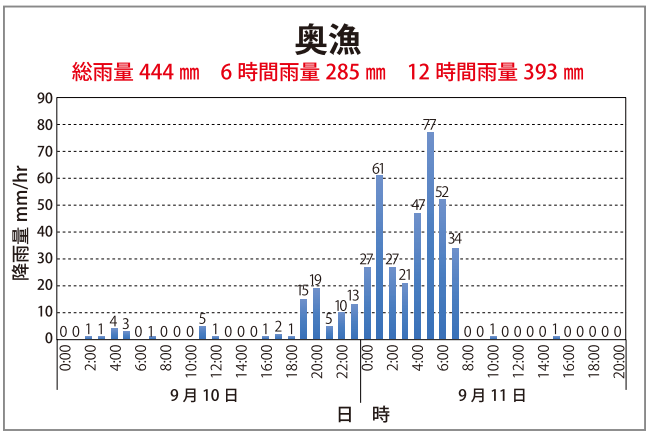
石狩川の歴史 弐

平成 26 年 9 月 9 日から 12 日にかけて、北海道の西海上に停滞する低気圧と上空に流れ込んだ寒気の影響によって大気の状態が非常に不安定になり、石狩地方、胆振地方を中心に 9 月 11 日未明から猛烈な大雨となった。このため、11 日には、石狩地方、空知地方、胆振地方に、北海道内では初めて「大雨特別警報」(土砂災害、浸水被害)が発表されるとともに、全道で約 92 万人の避難勧告(当時)が発令された。

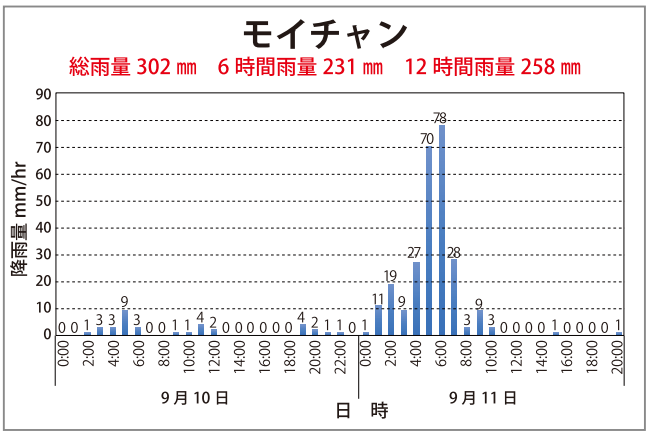
この大雨により、アメダスによる降水量では、千歳市支笏湖畔で総雨量 380 ㎜、時間最大雨量 70 ㎜、苫小牧で総雨量 297.5 ㎜、時間最大雨量 100 ㎜を観測するなど、記録的な大雨となった。また、北海道開発局所管の雨量観測所においては、漁川ダム上流の奥漁で、総雨量 444 ㎜、時間最大雨量 77 ㎜、モイチャンで総雨量 302 ㎜、時間最大雨量 78 ㎜を記録するなど、支笏湖周辺、漁川上流域を中心に強い強度の降雨が集中する猛烈な雨となった。北海道においても、本州並み豪雨が発生する現実を目の当たりにするとともに、気候変動による直接的な影響の現れを意識させる大雨であった。

この影響で、恵庭岳の沢沿いに発生した大規模な土石流や土砂崩れにより、札幌と支笏湖を結ぶ国道 453 号が各所で寸断されるなど大きな被害が発生した。漁川では、漁川ダム上流域で大量に発生した土砂と流木がダム貯水池に流入したものの、漁川ダムが洪水調節機能を最大限発揮し、下流の恵庭市中心部への影響を最小限に食い止めた。

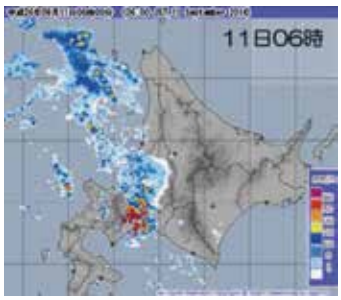
豊平川上流域を中心に、ところにより総雨量が 200 ㎜を超える大雨となった札幌市では、昭和 56 年 8 月洪水時以来、33 年ぶりの災害対策本部の設置となり、約 78 万人に避難勧告（当時）が発令されるとともに、家屋の浸水や道路、橋梁などに被害が発生し、札幌市の豪雨対応が検証される契機となった。支笏湖周辺・漁川上流域にかかっていた極めて強い雨域が少し北にずれ、隣接し人口・資産の集中する豊平川流域にかかっていたら、札幌市は、土砂災害や洪水氾濫等、極めて甚大な被害を受けていた可能性のあった大雨であった。



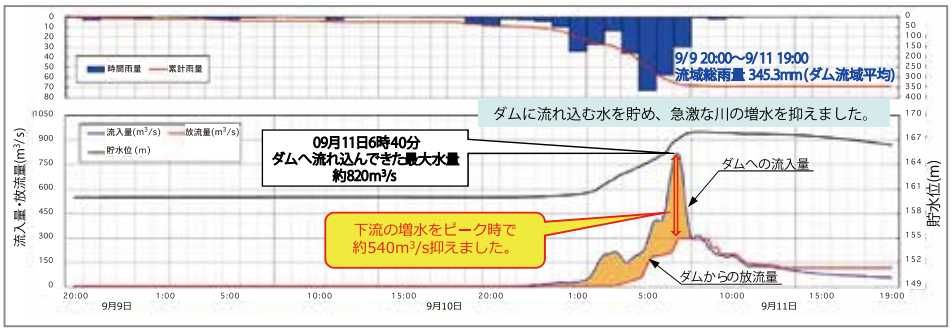
↑北海道開発局資料より作成



↑北海道開発局資料より作成



↑9 月 11 日 6 時時点のレーダ雨量
（札幌管区気象台資料より）



↑漁川ダムの防災操作（札幌開発建設部資料より）

流域の現在

8月にグランドオープンする複合庁舎はなのわ（画像提供：東神楽町）

東神楽町長
山本　進

東神楽町は、雄大な大雪山連峰のふもとに広がる豊かな自然環境に恵まれたまちです。農業を基幹産業とし、その豊かな大地で育まれたお米、野菜などの農産物は全国各地へと送られています。また、花と緑に囲まれたのどかな田園風景と旭川市に隣接した快適な住環境で30年に亘り人口が増加し、誰もが健康で生きがいの持てる福祉のまちづくりを進めています。

令和6年8月30日には本町出身で大阪・関西万博会場デザインプロデューサーを務める藤本壮介さんが基本設計を担当した複合施設はなのわがグランドオープンします。また、複合施設前の大規模なガーデンは上野ファームのガーデナー上野砂由紀さんにデザインをお願いし、町民のボランティアの皆さんとともに作り上げました。

ぜひ、「すてきな笑顔と花のまち」東神楽町へお越しください。

花の環と人の環で育み広げる

▶交流の拠点「はなのわ」完成

旭川市に隣接し、旭川空港を擁する東神楽町は、令和2年度国勢調査で15歳未満が15.3%と、道内で最も年少人口比率が高い「子ども王国」である。東神楽町は、平成28年に町内小中学校をコミュニティ・スクールに指定、平成31年から小中一貫教育をスタートさせるなど、きめの細かい子育て支援や教育体制を、地域と共に築き上げてきた。

↑東神楽130年記念オリジナルクラフトビール（画像提供：東神楽町）

令和5年には開拓の鍬が下ろされてから130年を迎えた。8月にグランドオープンを予定している複合施設はなのわは、役場機能や診療所、文化ホール花音等を円形の回廊で連結させ、建物の周囲を木で取り囲んだデザインが特徴的な町の交流の拠点だ。

▶内陸から漁業を変える

民間による画期的な取り組みも始まった。産業ガス大手のエア・ウォーターは、北海道で初めてサーモン（ニジマス）の陸上養殖施設「杜のサーモンプラント・東神楽」を令和5年に稼働させた。現在漁業は、地球温暖化等による漁獲量の減少や漁業従事者の高齢化など深刻な課題を抱えている。本事業では、需要の高いサーモンの安定供給を通じて、食料自給率の向上を目指している。東神楽町は同社と包括連携協定を締結し、災害発生時は避難所になり、生産されたサーモンは東神楽ブランドとしても活用される予定。

↑「杜のサーモンプラント・東神楽」の飼育水槽（画像提供：東神楽町）

立地の決め手は豊富な地下水だったという。この地には命を育む土壌がある。

流域の現在

道の駅南ふらのに隣接した複合商業施設（画像提供：南富良野町）

モンベル南富良野店クライミングピナクル（画像提供：南富良野町）

南富良野町長
髙橋　秀樹

北海道のほぼ中央に位置する南富良野町は、東西に貫流する空知川に沿って６つの集落から形成された町です。まちの中央には、かなやま湖（人造湖）があり、富良野・トマム・サホロのリゾートエリアの中心に位置する恵まれた立地条件のもと、自然を活かしたカヌーやラフティングなどの自然体験型観光が充実しています。

本年４月には、「道の駅南ふらの」エリアに大型複合遊具を含め７つの遊具を備えた新たな公園「なんぷアドベンチャーパーク」を開業し賑わいを見せており、来年春には道の駅棟のリニューアルオープンを予定しています。

世界へ発信、道の駅を核とした成長戦略

▶アウトドアフィールドの真ん中で

町の約９割が森林で、中央には金山ダムのダム湖「かなやま湖」が静かに水を湛える「太陽と森と湖のまち」南富良野町。一年をとおしてアクティビティを提供し、希少種イトウ保護の先進的なまちづくりでも知られている。この環境を活かし、南富良野高等学校は令和３年度から学校設定科目「アウトドア」を導入し、ラフティングやカヌー、カーリング、イトウの環境学習など、ここでしかできない教育の提供や、アウトドア人材を育成している。町内にはアウトドア会社が10もあり、アウトドアが職業として成り立っているのも強みだ。さらに令和４年４月、道内最大級を誇るアウトドアストアがオープンした。

↑南富良野高等学校のアウトドア授業
（画像提供：南富良野町）

▶防災と観光の拠点誕生

「道の駅南ふらの」の改修は、国土交通省の令和元年度「重点道の駅」に選定されたことを受け進められた。道の駅の隣にモンベルのストアや地元食材使用のレストラン等を備えた複合商業施設、向かいには宿泊特化型ホテル「フェアフィールド・バイ・マリオット・北海道南富良野」が開業。「幾寅地区MIZBEステーション」を含む一体を、防災・通年型観光・まちづくりの拠点とし、南富良野ならではのアドベンチャーツーリズムを世界に発信する。令和６年４月には大型複合遊具を備えた新たな公園「なんぷアドベンチャーパーク」がオープン、今後は、令和７年春に道の駅棟（物産センター）のリニューアルオープンを予定しており、令和８年度には幾寅地区MIZBEステーションの一部開業も計画している。世界の南富良野がついにベールを脱ぐ。

↑昔から親しまれてきたもち米どぶろく「白金山」（画像提供：南富良野町）

流域の現在

雲海と星空、上金剛山展望台から（画像提供：芦別市）

雲海朝、上金剛山展望台から（画像提供：芦別市）

芦別市長
荻原　貢

市の88%が森林のため、空気が澄んで星が美しく見えることから、「星空の街」として環境省から認定されており、「天然のプラネタリウム」とも呼ばれるほどです。星空スポット「上金剛山展望台」ではまちの夜景と満点の星空を同時に堪能できます。芦別温泉スターライトホテルに隣接する「おふろCafé星遊館」は別名「美肌の湯」と呼ばれる特濃源泉の温泉と、おしゃれな休憩スペースでコーヒーや漫画をゆっくり楽しめます。また、星遊館の徒歩圏内には自由を手ぶらで満喫できる「芦別スターグランピング」や、まるで童話の世界に泊ったような時間を過ごせる「ザランタン芦別」があります。

星に合宿、そして、山田錦の里へ

芦別市

▶培った文化に磨きをかけて

まちの四方を森林に囲まれた芦別市は、「星の降る里」のまちづくりに長年取り組んでいるが、近年は、年間約1万1,000人を受け入れる「合宿の里」としても有名だ。産炭地だった市内の炭鉱遺産は日本遺産「炭鉄港」に登録され、ソウルフードの「ガタタン」も「炭鉄港めし」に選ばれた。「ガタタン」は、具だくさんなとろみのあるスープで、ラーメンやチャーハン、焼きそばなどにもアレンジされ好評を博している。

↑女性に大人気、「おふろCafé星遊館」（画像提供：芦別市）

令和5年は芦別が130周年を迎え、「あしべつスター☆マラニック」を初開催し、まちが培ってきた文化などを再発見する機会となった。一方、エポックとなるチャレンジも結実を迎えようとしている。

▶西の横綱・山田錦に挑む

西日本が主産地で、寒冷な北海道で栽培は不可能といわれた酒米の横綱「山田錦」を、市内の加藤農場が「チャレンジしたい」と北海道銀行に相談したことから、「道銀・酒米プロジェクト」は始まった（平成28年～）。紆余曲折を経て、山田錦は一定の収穫が得られるようになり、令和4年8月、道内6蔵(8種)が山田錦を使った新酒を一般販売した。雑味のない香り高さはそのままに、蔵による味わいの違いも魅力だ。現在では、ふるさと納税の返礼品としても取り扱われている。

↑山田錦の道産日本酒。ふるさと納税の返礼品に！（画像提供：芦別市）

加藤農場は栽培の改善を進め、山田錦等のどぶろくの製造・販売を目指す予定だ。SAKEが世界から評価される中、道産日本酒の価値を高めた快挙といえる。

世界川紀行

スリランカの首都、ケラニ川を横断するコロンボ・スカイライン。

海外勤務の振り返り
～スリランカでの３年間～

札幌開発建設部 札幌河川事務所 計画課長
村上　隆志 氏

1 はじめに

2021年3月から2024年3月までの3年間、在スリランカ日本国大使館に赴任していました。スリランカは、新型コロナウイルス流行の前には世界的に有名なガイドブックにより訪れるべき国に選ばれるなど注目されていましたが、日本ではあまりなじみのない国かもしれません。インドの隣に位置するこの島国、モルディブへの中継地としても知られ、「紅茶」のイメージが強い国です。ここでは、筆者が生活し感じたスリランカについて紹介したいと思います。

2 スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテ

スリランカの正式名称はスリランカ民主社会主義共和国で、首都はスリ・ジャヤワルダナプラ・コッテです。正式名称ではタイのバンコクらしいのですが、通常使用されている名称としては世界で一番長い首都名という説もあります（筆者調べ）。1985年にコロンボから遷都されましたが、現在もコロンボが最大の都市であり、日本を含む各国の大使館が存在します。私も家族とともにコロンボで暮らしていました。

↑コロンボ市内のマーケット

↑コロンボ市内のスーパーマーケット

スリランカは北海道の約８割の国土面積を持ち、人口は約 2,200 万人です。民族構成はシンハラ人（75%）、タミル人（15%）、スリランカ・ムーア人（9%）で、公用語はシンハラ語とタミル語、そして英語が連結語として使用されています。宗教は仏教（70%）、ヒンドゥー教（13%）、イスラム教（10%）、キリスト教（7%）です。気候は熱帯地域に位置し、年間平均気温は 28℃前後、最高気温は年間を通して 30℃を超え高温多湿の毎日が続きます。

スリランカの主要産業の一つは紅茶栽培で、紅茶の輸出が盛んです。日本で販売されているほとんどの紅茶飲料の原材料としてスリランカ産（ヌワラエリヤ産やキャンディ産）茶葉使用となっていると思いますので、ラベルを確認してみてください。また、スリランカの歴史を振り返ると、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民地時代を経て 1948 年に独立しました。在留邦人数は 608 人（2023 年、在スリランカ日本大使館調査）、在日スリランカ人数は 34,966 人（2022 年 6 月現在、法務省）です。スリランカはアジアとヨーロッパを結ぶ航路の要衝に位置しており、幕末の頃から多くの日本人がコロンボを中継地として寄港しており、1921 年 3 月には当時皇太子であった昭和天皇が、訪欧の途次に 5 日間に亘りスリランカに立ち寄られ、コロンボの他古都キャンディーをご訪問されました。

3 日本との関わり

1951 年、故ジャヤワルダナ元大統領がサンフランシスコ講和会議にセイロン代表として出席し、「憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む（hatred ceases not by hatred, but by love）」という仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求権の放棄を表明するとともに、わが国を国際社会の一員として受け入れるよう訴える演説を行い、当時敗戦国である日本に対し厳しい制裁処置を求めていた一部の戦勝国にも大きな影響を与えたと言われています。

日本は 1980 年代初頭からコロンボ港の開発や主要国道、橋梁、空港などのインフラ整備を支援してきました。現在スリランカでは６つの紙幣が使用されていますが、そのうち３つの紙幣には、日本の ODA で建設されたトンネルや橋、港が描かれており、スリランカの人々にとっても身近で重要な支援を行っていることが分かります。

↑1,000 ルピー：ランボダ・トンネル（RAMBODA TUNNEL）
外務省ホームページから引用
HTTPS://WWW.MOFA.GO.JP/MOFAJ/GAIKO/ODA/HANASHI/STAMP/ASIA/KT_SRILANKA_01.HTML

4 コロナ禍での渡航

日本からの直行便はスリランカ航空のみ運行されていますが、新型コロナウイルスパンデミックの真っただ中での渡航だったため、乗客は 80 人程度であり機内サービスも限られていました。9 時間半後にバンダラナイケ国際空港に到着しましたが、空港スタッフは入国管理職員、PCR 検査証明書を確認する職員以外はほとんど見当たらず、陸軍の兵士が乗客を到着ロビーへ誘導していました。私の渡航時には入国者は 2 週間の隔離が義務づけられていたため、政府が手配したバスに乗り隔離ホテルへ移動しましたが、バスに乗った時点で空港に到着してから 3 時間が経過していました。

ちなみに、親切にスーツケースを運んでくれた私を誘導してくれた兵士は別れ際にチップをしかも日本円で要求してきました。もともとチップ文化のある国であることは知ってはいましたが、軍人からかなり高額のチップを要求されたことに驚きました。

5 担当していたODAプロジェクト

私が着任した際には円借款事業として、「ケラニ河新橋建設事業」、「バンダラナイケ国際空港拡張事業　パッケージB（エプロン、駐機場等の整備）」が大詰めを迎えていました。新型コロナウイルスの感染拡大によるロックダウンなどがありつつも、スリランカ政府が指定した11月には見事に完成を迎えました。

↑ケラニ河新橋（三井住友建設提供）

ケラニ河新橋は世界で日本で初めて建設されたエクストラドーズド橋であり、スリランカの玄関口であるバンダラナイケ国際空港から最大都市コロンボに至る際の入り口に架けられたランドマークとなっています。

この橋の開通式には大統領や首相、担当大臣のほか、4大宗教の最高指導者を迎え盛大な開通式が開催され、テレビで全国に生中継されるほど盛大な式典が催されました。

↑日本の支援で整備されたターミナル

一方で、日本とスリランカの関係においては一部のプロジェクトが一方的に契約を破棄されるなどの困難もありましたが、日本企業の努力と高品質の工事はスリランカの方々に高く評価されました。

6 債務の罠

「債務の罠」という言葉はスリランカでも現実の問題です。中国の支援で建設されたハンバントタ港が収益を上げられず、99年間に亘り中国国有企業にリースされることとなりました。私もハンバントタ港周辺を訪問したことがありますが、港湾だけではなく世界で一番暇とされている国際空港も中国の支援で整備され、港湾と空港を結ぶ道路は片側3車線の立派な道路が整備されていましたが、車どおりはまばらで、インフラの過剰投資が問題となっていることを実感しました。

7 経済危機とこれからのスリランカ

スリランカの主要産業は観光業ですが、コロナ禍で大打撃を受けました。その結果、スリランカの外貨準備高は急激に悪化し2022年4月に対外債務の支払い停止を宣言し、IMFに支援を要請しました。輸入に頼っていた燃料や医薬品、食品の不足から国民生活に重大な影響が出て、反政府デモが各地で続き大規模な暴動も発生し、大統領が国外逃亡する事態にまで発展しました。

日本としてもスリランカからの債務返済が停止されたことから、実施中の事業の借款を一時停止せざるを得なくなりました。スリランカ政府から円借款事業を受注していた日本企業への支払いも滞るなど、日本企業にとっても厳しい状況になりましたが、現在はIMFの支援の下で経済再生に向けて動き出しています。

8 おわりに

スリランカは8つの世界遺産を有し、紅茶やアーユルヴェーダ、南国のリゾートを楽しむことができる魅力的な国です。親日家が多く、温かい人々が迎えてくれる光り輝く島スリランカをぜひ一度訪れてみてください。

↑リゾートホテル

河川事業の紹介 01

北海道開発局　建設部　河川計画課

北海道初、MIZBE ステーション整備について

◉MIZBE ステーションとは

MIZBE ステーションとは、災害時に緊急復旧活動や水防活動を迅速に行うための拠点となる河川防災ステーションの機能に加え、平時における市町村等の取り組みにより、地域活性化や賑わいの創出が期待される河川防災ステーションを『MIZBE ステーション』として登録するものです。

災害時と平時両面の機能を併せ持つ MIZBE ステーションは、水防関係者や住民などあらゆる関係者に活用されることで「流域治水」推進の起点となり、また、地域の賑わいの核として地域活性化を推進します。

◉幾寅地区 MIZBE ステーションについて

南富良野町幾寅地区では、平成 28 年 8 月洪水において、金山ダムで既往最大流入量を記録し、空知川の堤防が決壊し、農地が冠水したほか、市街地が浸水し、家屋をはじめ避難所や要配慮者利用施設等においても浸水被害が発生しました。このことを背景に洪水等の水防活動等の拠点として施設整備を実施するものです。

また、南富良野町では通年型の観光地づくりを目指し「かわまちづくり計画」を策定し、幾寅地区 MIZBE ステーション、道の駅、ホテルを含む一体を地域観光・まちづくりの拠点に位置付け、平時は施設上面をデイキャンプやパークゴルフなどのレクリエーション施設の整備を想定しており、周辺施設と一体となった利活用により、地域活性化や賑わいの創出を図る取組を目指しています。

これらを背景に、洪水時等の水防活動等の拠点整備とあわせて、地域の賑わい創出を目的に、令和 5 年 8 月に北海道初の「MIZBE ステーション」として整備計画を登録し、令和 6 年度整備着工を予定しています。

河川事業の紹介 02

旭川市副市長　桝井 正将氏

水辺を楽しみ・体験する旭川

◉「川のまち」旭川

旭川市は、雄大な自然を彩る大雪山の麓の上川盆地の中で、穀倉地帯が広がるとともに、食料品、紙パルプ等の製造業、旭川家具をはじめとした木工等のものづくり産業が集積し、北北海道の拠点都市となっています。市内には石狩川をはじめその支流である美瑛川や忠別川をはじめ大小 136 もの河川が流れており、「川のまち」と呼ばれています。

また、国道 40 号の石狩川に架かる旭橋は、昭和 7 年の完成から 90 年経過した現在も当時と変わらない姿を保ち、現役で使われている橋としては北海道で最も古い鋼道路橋で、平成 16 年に北海道遺産に選定され、川のまち旭川のシンボルとして市民に親しまれています。

↑旭橋

◉北彩都あさひかわと かわまちづくりによる 水辺の楽しみ・体験

北彩都あさひかわは、川からのまちづくりを基本コンセプトとし、忠別川沿いの自然環境空間と買物公園等の市街地の一体化を図り、平成 26 年まで整備を進めてきました。都市機能に加え、ランニングや歩くスキーなど、季節を問わず市民に親しまれています。

一角を占める「あさひかわ北彩都ガーデン」では、忠別川の大きな景観を生かしながら，北国旭川の気候で育った植物等を市民や観光客が身近に触れ楽しむことができます。

↑北彩都あさひかわのエリア

また，ガーデン内の鏡池においては，カヌーやSUPを体験できるイベントが開催され，新たな水辺ファンを引き出すことが期待されます。

↑カヌーやSUPの体験

↑旭川駅周辺かわまちづくりのイメージ

石狩川・牛朱別川と隣接する常磐公園などを活かしたかつての「旭川かわまちづくり」に加え、令和５年度に新たに旭川駅南側地区を拠点に忠別川・牛朱別川の河川空間とまち空間をつなぐ観光動線の形成によるサイクリングやカヌー等の新たな観光価値の創出、自然豊かな市民の憩いの場の創出、回遊性向上による関係人口・交流人口の拡大を推進する「旭川駅周辺かわまちづくり計画」を策定し、今年度から各種取組を実施しています。

また、旭川市中心部にドッグランを設置して欲しいとの愛犬家からの要望を踏まえて、令和４年から試行調査を開始し、令和５年度は北彩都あさひかわ内のシビックコア広場において調査を実施しました。自然豊かな川の沿川という特徴が、人と動物が共生する心豊かな社会の実現に貢献することが期待されます。

↑ドッグラン試行調査の状況

河川事業の紹介 03

「恵庭かわまちづくり」の取り組みが「全建賞」を受賞

恵庭市と千歳川河川事務所が連携して整備を進めてきた「恵庭かわまちづくり事業」が、一般財団法人 全日本建設技術協会から【令和４年度全建賞】を受賞し、令和５年６月28日に東京で表彰式が行われた。

全建賞は、我が国の良質な社会資本整備の推進と建設技術の発展を促進するために設けられた歴史ある賞で、昭和28年（1953年）の創設以来、日本の社会経済活動を支える根幹的なインフラ整備や、その時々の国民ニーズに沿った幾多の取り組みに賞が贈られてきた。

恵庭市は、道と川の駅周辺を「花の拠点」と位置づけ、「はなふる（都市公園）」の整備とともに、民間事業者による新住宅団地の建設などを進めてきた。

「恵庭かわまちづくり」は、千歳川河川事務所がこれらの事業と連携し、河川管理用通路や親水施設等の整備を通じて、漁川と公園や市街地との連続性を向上させるとともに、良好な水辺空間を創造し、観光地としての魅力や生活環境の向上を図ったものである。

北海道内では、かわまちづくり関連の全建賞は、平成27年度の「忠別川河川空間整備事業（北彩都あさひかわ）」、令和元年度の「美瑛川地区かわまちづくり」が受賞している。

令和5年度 河川・海岸協力団体の取り組み

河川・海岸協力団体制度

河川協力団体制度は、河川法に基づき、自発的に河川の維持、河川環境の保全等に関する活動を行うNPO等の民間団体を支援するもので、平成25年度に開設。河川協力団体として活動を適正かつ確実に行うことができると認められる法人等が対象となる。河川管理者に申請を行い、申請を受けた河川管理者は、審査のうえ、河川協力団体として指定する。一方、海岸協力団体制度は、海岸法に基づく同様の制度で、平成26年度に開設された。

河川(海岸)協力団体としてのおもな活動

1. 河川(海岸)管理者に協力して行う河川(海岸)工事または河川(海岸)の維持
2. 河川(海岸)の管理に関する情報または資料の収集および提供
3. 河川(海岸)の管理に関する調査研究
4. 河川(海岸)の管理に関する知識の普及および啓発

石狩川流域の河川協力団体　R6.3 現在

法人等の名称 おもな活動	水系名・河川名	
赤平ラブ・リバー推進協会 河川清掃(植花活動含む)、河川美化啓蒙活動	石狩川・空知川	
幾春別川をよくする市民の会 河川清掃、自然体験学習	石狩川・幾春別川	
石狩川下覧櫂 河川清掃、川下り、子ども川塾など	石狩川・石狩川	
栗山町ハサンベツ里山計画実行委員会 動植物調査、自然体験学習、夕張川に関するシンポジウム等	石狩川・夕張川	
NPO法人 まち・川づくりサポートセンター 河川清掃、自然体験学習、滝川地区地域防災施設「川の科学館」展示物の説明等	石狩川・石狩川	
NPO法人 山のない北村の輝き 河川調査、自然体験学習、植樹、河川管理者と連携した伐木処理	石狩川・旧美唄川	
株式会社 協和コンサルタント 河川清掃	石狩川・美瑛川	
NPO法人 グラウンドワーク西神楽 河川清掃、自然体験学習ほか	石狩川	美瑛川 辺別川
河川愛護団体 リバーネット21ながぬま 自然体験学習、子ども水防団の訓練、植樹活動	石狩川	夕張川 嶮淵川
NPO法人 ふらっと南幌 フットパス事業、河川清掃(除草含む)、植物調査、自然体験学習、幌向湿原の調査・勉強会	石狩川	夕張川 旧夕張川 千歳川 石狩川
NPO法人 カラカネイトトンボを守る会 あいあい自然ネットワーク 当別地区におけるトンボ類の調査・研究。環境教育、自然観察会、ビオトープ維持保全活動、研究、保全活動、「トンボの学校」の維持保全活動、カヌー下り	石狩川	石狩川 当別川 茨戸川
NPO法人 三笠森水遊学舎 学習・体験活動による社会教育の推進や子どもの健全育成、適正な河川利用と森林環境の保全など	石狩川・幾春別川	
株式会社　日興ジオテック 河川清掃、築堤天端除雪	石狩川	美瑛川 忠別川
株式会社　櫻井千田 砂川遊水地の外周道路天端除雪、河川清掃参加、冬の滑り台造成	石狩川・石狩川	

石狩川流域以外の道内の河川協力団体　R6.3 現在

法人等の名称 おもな活動	水系名・河川名	
NPO法人 後志利別川清流保護の会 河口・河川清掃、自然体験学習、植樹活動	後志利別川・後志利別川	
NPO法人 沙流川愛クラブ 河川清掃、オコタン川湿原周囲環境整備、植樹活動、日高源流域国有林枝打ち活動	沙流川・沙流川	
釧路・リバー・プロテクション・21の会 河川清掃、ヤマベ稚魚放流	釧路川	新釧路川 釧路川
NPO法人 十勝多自然ネット 小学生対象の魚類捕獲と観察・水質測定、農業高校生による湿地の魚類等調査	十勝川	札内川 十勝川
NPO法人 天塩川を清流にする会 カシワの森の移植、河川清掃、ハマナス等の移植、野鳥観察	天塩川・天塩川	
ルルモッペ河川愛護の会 サクラマスの稚魚放流、河川清掃、サクラマスの発芽卵の埋設放流、るもい川まつり	留萌川・留萌川	
NPO法人 しりべつリバーネット 子どもの水辺安全講座、河川清掃、自然体験学習	尻別川・尻別川	
ネイチャー研究会 in むかわ 河口干潟の除草、外来種の防除	鵡川・鵡川	
十勝川中流部市民協働会議 札内川富士築堤工事で消失する野草を相川原生花園へ移植	十勝川・十勝川	
NPO法人 帯広NPO28サポートセンター 河川清掃、自然体験学習、ミズベリング十勝会議	十勝川	札内川 帯広川
NPO法人 タンチョウ保護研究グループ タンチョウをはじめとするツル類を保護のため生息環境等の調査研究、保護への啓蒙活動など	釧路川	新釧路川 釧路川 オソベツ川
釧路自然保護協会 イトウ生息状況調査、サケ・マス産卵床分布調査	釧路川	新釧路川 釧路川 オソベツ川
NPO法人 サロベツ・エコ・ネットワーク 鳥類の生息・繁殖状況調査、野鳥報告会及び環境学習会の開催、河川工事・調査へのアドバイス	天塩川	天塩川 問寒別川
NPO法人　ダウン・ザ・テッシ 環境整備・河川清掃、安全パトロールなど	天塩川・天塩川	

道内の海岸協力団体　R6.3 現在

法人等の名称 おもな活動	沿岸名・海岸名
白老町環境町民会議 海岸清掃、環境パネル展、海塾、海岸パトロール	日高胆振沿岸・胆振海岸

河川協力団体 TOPICS

「十勝川中流部市民協働会議」が第15回“いい川”・“いいかわづくり”ワークショップで広松伝賞を受賞

令和５年９月30、31日に東北大学青葉山キャンパスで、第15回“いい川”・“いいかわづくり”ワークショップが開催され、「十勝川中流部市民協働会議」（平成28年河川協力団体指定）が広松伝賞を受賞した。河川に隣接している病院の関係者や付属保育園児を対象に、アンケートの実施やその結果に基づく水路の整正・植樹活動・生物ガイドブック作成・水生生物観察会等を実施するなど、病院と連携した活動が評価された。

○広松伝賞とは、市民・住民の視点や立場で川や水辺の保全、回復に貢献するなど、市民のために働いた人などに贈られる賞

↑十勝川中流部市民協働会議の取組発表と、「病院と連携したウツベツ川の利活用と整備」パネル

「NPO法人 山のない北村の輝き」が「わが村は美しく－北海道」運動、第11回コンクールで優秀賞を受賞

「NPO法人 山のない北村の輝き」（平成26年河川協力団体指定）は、河川環境の維持や植樹活動、農泊やキャンプをしながら収穫などの農作業を体験できる企画のほか、自然景観を堪能できるカヌー体験やガイドによる北村地域の歴史見学を行うなど、地域内外との交流を図っている。また、「北村の記憶～川といきる・村をひらく・農をおこす」や、「北村三兄弟物語」といった北村の歴史に関する副読本も作成しており、今後は歴史ガイドツアーへの活用も予定している。これらの活動が評価され令和５年度の優秀賞を受賞した。また、車内誌「The JR Hokkaido」の令和６年４月号にも紹介された。

「わが村は美しく－北海道」運動とは
- ●北海道の農林水産業をより豊かにすることを目指し、平成13年にスタート
- ●道内各地で地域資源を活用して地域を活性化しようとする住民主体の活動に対する支援

↑旧美唄川河川清掃

↑旧美唄川のカヌー下り

↑北村の歴史に関する本

河川協力団体 TOPICS

令和5年度「北海道河川協力団体連絡会議」全体会の開催

～昨年度に引き続き管轄事務所意見交換会を経て通算6回目の全道対面会合を開催～

令和５年度の「北海道河川協力団体連絡会議」に係る取組は、新型コロナ感染症が令和５年５月から５類感染症に移行したことから、意見交換等は対面で進められた。その中で「管轄事務所意見交換会」については、10 月中旬から 12 月初旬にかけて、各河川協力団体、各河川事務所等の連携により、全道の 24 団体、13 事務所、14 回開催され、延べ参加人数 155 名により当年度の活動状況報告、各河川事務所からの情報提供、活動を行う上での課題、要望等の意見交換が行われた。

全道の河川協力団体が一堂に会する「全体会」については、令和６年３月１日（金）に開催された。河川協力団体 24 団体 43 名、河川事務所等 20 課所 33 名、事務局（河川工事課、当財団）17 名を含め、総勢 93 名の参加となった。管轄事務所意見交換会の議論を踏まえ、下記内容について報告、意見交換等がなされた。意見交換では、前段に事務局より「制度創設 10 年のあゆみ」について説明があり、各テーブルでは「河川協力団体制度創設 10 年をふりかえって」をテーマに議論し、各テーブルごとに議論内容を報告した。10 年間の活動の総括、河川協力団体の抱える課題、河川管理者とのさらなる協働の重要性等の共通認識と、今後の活動に向けた一定の整理がなされた。

全体会の議事内容
- 規約改定、「管轄事務所意見交換会」、「分科会」の概要報告
- 新規団体の紹介と活動報告
- 北海道開発局からの情報提供
- 各団体等の取組紹介

①安全講習会分科会の取組、②釧路川取組概要
- テーブルディスカッション、意見交換

↑開会挨拶

↑新規指定団体の紹介、活動報告

↑テーブルディスカッション

↑集合写真

「安全講習分科会」で第2回安全講習会を開催

北海道河川協力団体連絡会議「安全講習分科会」の取組として、昨年度より NPO 法人 三笠森水遊学舎（平成 31 年河川協力団体指定）がリーダーとして講師を務め、総勢 20 名が参加して第２回安全講習会を令和６年６月８日（土）に開催した。講習会は座学と現地講習で構成され、参加者は川活動で必要な能力や安全管理等を学び、実際に川の流れを身をもって知った。

↑心肺蘇生法、AED 体験

↑楔形スクラムでの渡河

第２回安全講習会メニュー

①座学（三笠市中島公民館）
- 主催者の責任と必要な能力、安全管理
- 川活動で考えられるリスク他
- 心肺蘇生法、AED 体験他

②現地講習（幾春別川上流カヌーコース）
- スローロープ練習
- 川流れとレスキュー体験
- 楔形スクラムでの渡河

石狩川振興財団の活動報告

01 流域環境保全活動 / 河川教育活動

02 NPO・市民団体等への支援・助成

03 市町村河川情報委員情報交換会議

04 石狩川流域圏会議

05 かわたびほっかいどう大賞

01 流域環境保全活動

石狩川振興財団では、石狩川流域 300 万本植樹運動等、流域の緑化活動を支援・推進しています。また、石狩川クリーンアップ作戦など、河川をきれいにする取組を積極的に支援しています。

石狩川クリーンアップ作戦

○事業対象者／石狩川流域市町村住民
○実施場所／石狩川流域市町村の堤防・河川敷等
○実施月日／令和 5 年 4 月下旬から 10 月 31 日
○参加人数等／ 15 団体、3,324 名

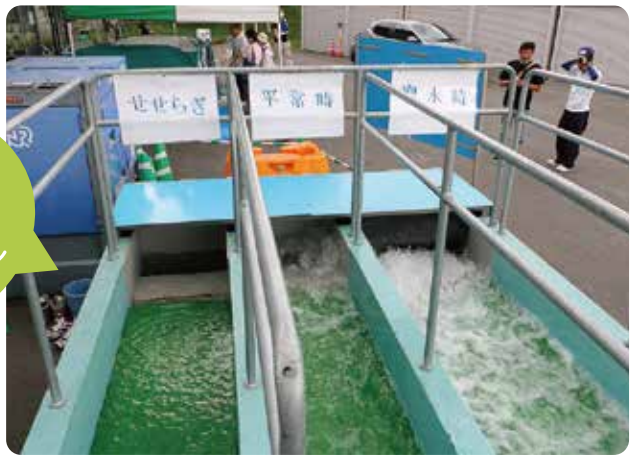
事業内容　各市町村の市民団体等と河川敷のゴミ収集を行う

↑この活動が河川の環境美化へ

01 河川教育活動

石狩川振興財団では、石狩川の水害や治水の歴史、水利用、流域の風土・水文化、防災、河川環境及び川の安全利用などをテーマに、北海道開発局、地域のNPO等と連携して河川教育活動を実践しています。

防災フェスティバル



○事業対象者／砂川市民
○実施場所／砂川遊水地管理棟、砂川遊水地
○実施月日／令和５年７月30日
○参加人数等／約650名

事業内容　講演、川の流れの強さの違い、カヌー体験、科学実験など

↑10回目となる今回は避難所生活も体験

落ち葉アート

○事業対象者／砂川小学校１年生
○実施場所／砂川遊水地管理棟
○実施月日／令和５年10月20日
○参加人数等／37名

事業内容　落ち葉アートづくり

↑葉っぱのおばけ現る！

ジャリン子冬体験塾

○事業対象者／砂川在住の子ども達と保護者
○実施場所／砂川遊水地
○実施月日／令和６年２月10日
○参加人数等／55名

事業内容　ワカサギ釣り体験

↑ワカサギの群れはいるかな～

詳細は 一般財団法人　石狩川振興財団　ウェブサイト　https://www.ishikari.or.jp に掲載しています

02 NPO・市民団体等への支援・助成

石狩川振興財団では、NPO や市民団体等が主体となって推進する川を基軸としたまちづくり、環境学習活動及び健康増進活動等に対し支援・助成を行っています。

① NPO・市民団体等への支援・助成

NPO など非営利団体に対して支援・助成を行っています。令和 5 年度の支援団体名は次のとおりです。

令和 5 年度　市民団体等支援・助成概要

番号	団　体　名	新規 継続
1	石狩川下覧櫂	継続
2	砂川子どもの水辺協議会	継続
3	特定非営利活動法人 まち・川づくりサポートセンター	継続
4	特定非営利活動法人 札幌歩こう会	継続
5	バイオブロック工法普及連絡協議会	継続
6	特定非営利活動法人 山のない北村の輝き	継続
7	和光地区子ども会育成連絡会	継続
8	道北の地域振興を考える研究会	継続
9	たきかわ子ども水辺協議会	継続
10	NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティー	継続
11	特定非営利活動法人 ダウン・ザ・テッシ	継続
12	特定非営利活動法人 ふらっと南幌	継続
13	公益社団法人 滝川スカイスポーツ振興協会	継続
14	特定非営利活動法人 沙流川愛クラブ	継続
15	徳富川ラブリバー推進協議会	継続
16	特定非営利活動法人　江別における持続可能なコモンズのためのしくみ（ミズベリング江別事務局）	継続
17	中川町観光協会	継続
18	NPO 法人 天塩川を清流にする会	継続
19	ネイチャー研究会 in むかわ	継続
20	十勝川中流部市民協働会議	継続
21	キトウシサイクリング実行委員会	継続
22	白老町環境町民会議	継続
23	恵庭河川愛護会	継続
24	オアシスパークからゆめまちづくり協議会	継続
25	特定非営利活動法人 エゾシカネット	継続
26	砂川観光協会	継続
27	認定 NPO 法人 カラカネイトトンボを守る会	継続
28	一般社団法人　かのあ	継続
29	砂川レイクサイドの会	継続
30	特定非営利活動法人 オアシス	継続
31	特定非営利活動法人 三笠森水遊学舎	継続
32	ハーブの小径を愛する会	継続
33	釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイルート運営代表者会議	継続
34	釧路自然保護協会	継続
35	道東ホースタウンプロジェクト	継続
36	旭川サイクリング協会	新規
37	ルルモッペ河川愛護の会	新規
38	釧路川カヌーネットワーク協会	新規
39	三笠ジオパーク推進協議会	新規
40	旭川駅周辺かわまちづくり検討会アクティビティ WG	新規
41	石狩川流域湿地・水辺・海岸ネットワーク	新規

↑単座機ラインナップ風景
（滝川スカイスポーツ振興協会）

↑紅葉ツーリング
（特定非営利活動法人ダウン･ザ･テッシ）

↑ながぬま緑の少年団
（リバーネット 21 ながぬま）

↑花壇（恵庭河川愛護会）

② 公益目的事業による支援

石狩川流域の振興に資する各種大会、イベントなどに協賛し、その活動を支援しています。

令和 5 年度　公益目的事業支援概要

番号	団　体　名	新規 継続
1	公益財団法人ツール・ド・北海道協会	継続
2	公益社団法人北海道スカイスポーツ協会	継続
3	他	

03 市町村河川情報委員情報交換会議

石狩川振興財団では、石狩川流域全46市町村の河川担当部長・課長から構成される市町村河川情報委員を運営しています。令和5年10月19日(木)に、石狩川流域市町村の河川情報委員と北海道開発局、北海道等約75名が参加して「市町村河川情報委員情報交換会議」を札幌市で開催しました。

↓前田康吉会長からのムービーメッセージ

まず、「『かわたびほっかいどう』と石狩川流域」では、北海道開発局建設部河川工事課 古溝河川技術対策官から「北海道の河川における地域活性化の取り組み」についてご講演をいただきました。昨年8月、かわまちづくり支援制度に登録された旭川市からは、計画の概要や今後の展望を説明いただきました。北海道開発局開発監理部開発連携推進課 岡部課長の「北海道開発局の観光への取組」では、ドライブ観光やインフラツーリズムの事例を紹介いただきました。「防災関係等の最近の情勢」としては、北海道開発局建設部河川計画課から「流域治水の取組」、札幌管区気象台気象防災部から「令和5年出水期の主な改善事項について」、北海道建設部土木局河川砂防課から「河川整備等に関する起債事業制度」の説明をいただきました。本情報会議は、国、道、市町村が一堂に会して情報を共有し、議論する場としての重要性を認識する機会となりました。

令和5年度市町村河川情報委員　情報交換会議プログラム

◎開催日時　令和5年10月19日(木)15：00
◎開催場所　札幌ガーデンパレス

1. 開会挨拶

(一財)石狩川振興財団理事長　髙橋　季承
※ムービーメッセージ（会長　前田　康吉）

2. 議　　題

1)「かわたびほっかいどう」と石狩川流域

①北海道の河川における地域活性化の取り組み(講演)
北海道開発局建設部河川工事課　河川技術対策官　古溝 幸永 氏

②かわたび事例報告 旭川駅周辺かわまちづくり
旭川市地域振興部地域振興課　課長補佐　箕浦　剛 氏

○意見交換及び質疑応答

2) 講演「北海道開発局の観光への取組」

北海道開発局開発監理部開発連携推進課　課長　岡部　博一 氏

3) 防災関係等の最近の情勢

①流域治水の取組
北海道開発局建設部河川計画課　河川計画調査官　川岸　智樹 氏

②令和5年出水期の主な改善事項について
札幌管区気象台気象防災部　気象防災情報調整官　平澤　朋美 氏

③河川整備等に関する起債事業制度
北海道建設部土木局河川砂防課　課長補佐　立川　義通 氏

○意見交換及び質疑応答

04 石狩川流域圏会議

石狩川流域圏会議は、石狩川流域の全 46 市町村の首長から構成されており、平成 23 年に発足しました。石狩川振興財団は、石狩川流域圏会議の活動と連携しながら、石狩川流域市町村の地域防災力向上や川を通じた地域の活性化を目指した取り組みを進めています。

石狩川流域圏会議「本会議」

石狩川流域全 46 市町村の首長が一堂に集う石狩川流域圏会議「本会議」が、令和 6 年 4 月 23 日に滝川市で開催されました。議長の前田滝川市長から挨拶があり、続いて令和 5 年度事業経過報告、令和 6 年度事業計画、収支予算が議決されました。

講演は、国土交通省 水管理・国土保全局の奥田晃久治水課長から「最近の治水行政について」、公益財団法人 河川財団の関克己理事長から「新たな治水と水防で社会の安全をめざす～北海道から始める流域治水～」で、激甚化・頻発化する豪雨災害に対する治水の最新情報、流域連携において全国をリードする北海道の取り組みなどを共有する機会となりました。

↑前田議長（滝川市長・当財団会長）による挨拶

↑国土交通省 水管理・国土保全局の奥田晃久治水課長による講演

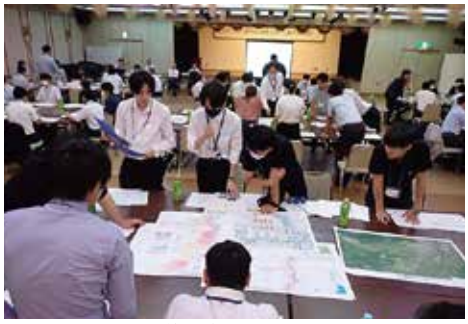
↑公益財団法人河川財団の関克己理事長による講演

令和 5 年度 豪雨災害対策職員研修

石狩川流域圏会議では、水害経験のある市町村職員が減少していることを踏まえ、石狩川流域市町村の豪雨災害担当者を対象に、平成 25 年度から豪雨災害対策職員研修を、平成 27 年度からは天塩川流域市町村の豪雨災害担当者も対象に実施しています。

今回は、参加者が適宜受講する e ラーニング研修と (7 月中)、危機管理演習を 3 年ぶりに対面で実施しました (石狩川流域 7 月 27 日滝川市、天塩川流域 8 月 2 日士別市)。e ラーニング研修では、北海道大学の髙橋客員教授による「豪雨災害時の対応について」、北海道開発局、北海道、札幌管区気象台による防災、気象、河川情報に関する基礎知識等の講座と、南富良野町による「平成 28 年出水を経験して」という動画を適宜受講していただきました。危機管理演習においては、豪雨災害の発生を想定し、参加者はグループ内で討議を行った後、取りまとめて発表を行い、最後に髙橋客員教授から講評が行われました。オンラインと対面の組み合わせによる研修は概ね好評でしたが、参加者によるアンケート等も参考に改善を図っていきたいと思います。

↑e ラーニングのログイン画面


↑石狩川流域の危機管理演習

↑天塩川流域の危機管理演習

令和５年度　石狩川流域圏ルート走行会

石狩川流域圏会議では、自転車で石狩川流域を結びつけ、流域全体の活性化を図ることを目指して、「石狩川全図編」や「石狩南部・空知南部編」、「旭川・美瑛編」、「北・中空知編」のサイクリングコースマップを製作し、サイクリングコースを活用した走行会を開催しています。令和５年度は、上・中・下流の３コースで走行会を実施しました。

◎走行会 in 空知（約 38 ㎞）10 月 3 日：砂川市（北海道子どもの国）→ 浦臼町（道の駅つるぬま）→ 砂川市（みんなの工場～ナカヤ菓子店～ソメスサドル～子どもの国）　参加者　23 名
◎走行会 in 千歳（約 35 ㎞）10 月 4 日：千歳市（新千歳空港）→ 千歳市（道の駅サーモンパーク）→ 恵庭市（道の駅花ロードえにわ）→ 北広島市（エスコンフィールド）　参加者　22 名
◎走行会 in 旭川（約 35 ㎞）10 月 25 日：旭川市（JR 旭川駅）→ 旭川市（駅南サイクリングロード）→ 旭川空港 → フットパス体験サイクリングロード → 会議（ガーデンセンター）→ JR 旭川駅　参加者　13 名

今後もサイクリストが安全・快適に走行できるよう流域自治体や関係機関と連携して、分かりやすい案内標識等の設置など走行環境の整備とコンビニ等との連携を検討し、課題を整理して方針の具体化を図っていきます。

↑画像全て石狩川流域圏ルート走行会 in 空知

05　かわたびほっかいどう大賞

第三回かわたびほっかいどう大賞決定

↑審査会の様子

かわたびほっかいどうでは、水辺にまつわる活動報告（Web 記事）の中から、特に優れたものを表彰する「かわたびほっかいどう大賞」を実施しています。第三回となる令和５年度は、全道 355 の活動計画の中から、エントリーされた 13 地域のプレゼンテーションと審査が行われました。審査結果は以下のとおりです。

第三回かわたびほっかいどう**大賞受賞**「水辺で千歳の“みらい”を語ろう -RIVER CITY PROJECT CHITOSE みらい EXPO- 開催」（千歳青年会議所　千歳市　千歳川河川事務所）、**優秀賞受賞**「えべつの新しい日常をここから シン・エベツ」（シン・エベツ実行委員会　江別河川事務所）、**優秀賞受賞**「釧路湿原の魅力を解説します　～くしろ自然再生解説員～」（くしろ自然再生解説員　釧路開発建設部）、**優秀賞受賞**「利別川資材ヤード（池田町避難の丘）流域治水の防災学習を行いました」（北海道池田高等学校　池田町　池田河川事務所）

↑大賞「RIVER CITY PROJECT CHITOSE」

かわたび ほっかいどう
KAWATABI HOKKAIDO
▲かわたび ほっかいどうHP

石狩川振興財団は「かわたびほっかいどう」を推進しています。

かわたび ほっかいどう

KAWATABI HOKKAIDO

▲かわたび ほっかいどうHP

川に関する情報の発信、
魅力的な水辺空間の創出、
水辺利活用の促進、
地域とのつながりの促進などを進める
北海道発のプロジェクト

「水辺っておもしろい！」を満喫できる、初めての情報サイト！

手軽なアクティビティから、施設・イベント情報、さらにグルメな話題まで。北海道の川や水辺界隈の楽しみをまるごと伝えてくれる、ワクワクがたっぷりの情報サイトがオープンしました！

かわたびほっかいどう　Search!

https://kawatabi-hokkaido.com/

水辺の観光情報サイト
「かわたび北海道」HP

川のアクティビティ（空知川上流のラフティング）

水辺のイベント（豊平川の川見）

冬でも水辺利用（砂川遊水地ワカサギ釣り）

豊平峡ダム見学ツアー、ダムで貯蔵したワイン

河川沿いのサイクリングと青い池（美瑛川かわまちづくり）

流域治水オフィシャルサポーター

流域治水

国土交通省は、あらゆる関係者との連携のもと、流域全体で治水対策に取り組む「流域治水」を促進するため、流域治水の推進に取り組む企業等を「流域治水オフィシャルサポーター」として認定しています。（令和５年３月創設）
（一財）石狩川振興財団は、令和５年度に引き続き令和６年度において「流域治水オフィシャルサポーター」として認定されました。
「流域治水」に関わる情報提供や石狩川流域圏会議と連携した取り組み等、引き続き「流域治水」に資する取り組みを推進してまいります。

一般財団法人　石狩川振興財団

●発行　令和6年8月

●住所　〒001-0011
北海道札幌市北区北11条西2丁目2番17号
セントラル札幌北ビル2階
TEL:011-299-7755　FAX:011-299-7550

●ホームページアドレス　https://www.ishikari.or.jp

※表紙写真：北竜町のヒマワリ畑
一面に広がるヒマワリや菜の花、ラベンダー、そばの花など、色とりどりの花が流域の魅力を高め、国内外から多くの観光客を引き付けています